



日本植物病理学会ニュース 第23号

(2003年8月)

【名誉会員・永年会員・貢献者の略歴とお話】

名誉会員 大内成志



昭和8年1月9日広島市において出生。本籍は愛媛県大三島町。香川県立農科大学を経て、昭和32年3月京都大学大学院農学研究科（農林生物学専攻）修士課程を修了。米国南イリノイ大学大学院（微生物学専攻）博士課程修了後、昭和43年6月帰国、同年7月京都大学助手に任官、赤井重恭教授に師事。昭和

45年4月岡山大学農学部助教授、昭和60年4月近畿大学農学部教授、平成13年3月定年により退職、同年4月同大学大学院特任教授、同年8月オレゴン州立大学客員教授併任、平成14年3月特任退職、同年4月同大学名誉教授。平成15年5月カリフォルニア大学デービス校客員、現在に至る。非常勤講師：名古屋大、神戸大、香川大、京都府立大、岡山大、北海道大、鳥取大、佐賀大。近畿大学においては大学院農学研究科長、農学総合研究所長、大阪 TLO 近畿大学事業所コーディネーター等を歴任。学会活動：日本植物病理学会庶務幹事、編集幹事長、評議員、関西部会長、会長、英文誌発刊準備委員会委員、国際植物病理学会評議員、第1回アジア植物病理学会議副会長。Molecular and Physiological Plant Pathology 編集委員。第1回～第8回日米科学セミナーに講演者・組織委員・組織委員長として関与。第2回～第7回国際植物病理学会議、NATO 国際研究集会等に参加・講演。米国、カナダ、英国、ノルウェー、ドイツ、オランダ、ベルギー、スイス、ポーランド、チェコスロバキア、中国等多くの国の大学・研究所・研究集会において講演。受賞：日本植物病理学会賞（1986）、アメリカ植物病理学会賞（フェロー）（1996）、日本農学賞・読売農学賞（2002）。研究：感染を宿主と病原体の遺伝子相補反応として把握し、主としてオオムギうどんこ病を研究材料として感染機構を研究。宿主・病原体相互反応の分子機序解明の基礎となる受容性の概念の提唱と実証。希望：植物病理学徒の使命は病害防除を通じて、人類生存を保障する食料の量的生産確保に貢献することであることを再認識し、研究・教育の国際的評価を高めるとともに、会員各位がそれぞれの分野においてアジアにおけるリーダーとして活躍されることを希望します。

んこ病を研究材料として感染機構を研究。宿主・病原体相互反応の分子機序解明の基礎となる受容性の概念の提唱と実証。希望：植物病理学徒の使命は病害防除を通じて、人類生存を保障する食料の量的生産確保に貢献することであることを再認識し、研究・教育の国際的評価を高めるとともに、会員各位がそれぞれの分野においてアジアにおけるリーダーとして活躍されることを希望します。

名誉会員 土崎常男



昭和8年2月25日兵庫県生まれ、昭和26年岐阜市立高等学校卒業、昭和31年東京大学農学部農学科卒業、卒業後伊藤忠商事株式会社に2年間勤務した後、東京大学生物系大学院に入学し、昭和39年同大学院博士課程を修了した。同年東京大学農学部助手、昭和41年農林省植物ウイルス研究所研究員、昭和53年

北海道農業試験場病害第2研究室長、昭和55年植物ウイルス研究所病理研究室長、昭和58年農業研究センターウイルス病防除研究室長、昭和63年東京大学農学部教授、平成5年同大学を定年退官後、鯉渕学園農業生活専門学校作物保護研究室教授となり、平成15年3月に同学園を定年退職した。大学院の博士論文の課題が「マメ科植物のウイルス病とその種子伝染に関する研究」と、植物ウイルスに関する研究でスタートして以来、東大及び農水省に在職中もマメ科植物、各種野菜、ムギ類、クワ、カンキツなど多くの植物に発生するウイルス病について分類同定を中心に研究し、定年退職するまで一貫して植物ウイルスを研究課題とした。学会とは会計幹事、国際植物病理学会京都大会財務委員長、病名目録委員、学会報編集委員、学会英文誌発行準備委員長、評議員、副会長、会長など色々と係わりを持ったが、特に、副会長、会長時代に評議員の定年制導入な

どの学会改革に取り組んだことを懐かしく思い出す。現在、植物病理学研究は遺伝子レベルの研究へと深化し、農業との乖離が目立つようになってきている。植物病理学はもともと農業との係わりで生まれたものであり、今後も農業との係わり、すなわち、圃場レベルの研究を離れて植物病理学は存在しないと考えられる。そうした意味で、若い研究者が遺伝子レベルの研究と並んで、圃場レベルの研究の重要性を十分認識され、植物病理学研究を進められることを希望する。

永年会員 浅川 勝



昭和2年5月4日、群馬県前橋市に生まれる。昭和27年、東京大学農学部農芸化学科卒業。農林省農業技術研究所入所、病理昆虫部農薬科に勤務。昭和29年より福永一夫科長、見里朝正室長のもとで農業用抗生物質の開発研究に従事し、イネいもち病に有効なブラストサイジンSを開

発。昭和40年、農薬科農薬化学第1研究室長となり、カーバメート系殺虫剤等の研究に従事。昭和56年同所企画連絡室企画科長、昭和58年農業環境技術研究所企画連絡室長、昭和60年、同所環境管理部長を経て、昭和61年に退職。この間、農業資材審議会農薬部会専門委員、環境庁農薬登録保留基準設定技術検討会委員（水質汚濁委員長）などを勤めた。退職後は農業生物遺伝子構造解析技術研究組合専務理事、(社)農林水産技術情報協会技術主幹、技術参与、研究顧問、(社)大日本農会専門調査員等を歴任。また、日本農薬学会の設立に参画し、昭和50年の設立以来評議員を勤め、昭和60年には副会長、昭和62年より2年間は会長を勤めた。その他日本農芸化学会評議員(昭和52～57年)、日本応用動物昆虫学会評議員(昭和52～59年)を勤めた。昭和37年、農学博士(抗いもち病性抗生物質の製剤学的研究)。昭和55年に日本農薬学会功労賞受賞、平成5年には農林水産試験研究功績者表彰で農林水産技術会議会長賞(抗生物質のイネいもち病防除への利用—ブラストサイジンSの開発—)を福永一夫氏と共に受賞。著書には「農薬の科学と応用」(共編・分担執筆、昭和47年)、「農薬—安全性をめぐる技術と行政」(分担執筆、昭和56年)、「作物病虫害ハンドブック」(共編・分担執筆、昭和61年)、「昭和農業技術発達史(第7巻)」(分担執筆、平成10年)、「近代農業技術年表」(共編、平成12年)等がある。

植物病理学会には長い間一会員として籍をおいていただけで、何のお役にもたっていないのに、このたび永年会員にご推挙いただき、大変有り難く、深く感謝申し上げる次第です。

永年会員 堀 眞雄



昭和3年1月16日島根県で出生。昭和23年鳥取農林専門学校卒業。同年農林省農事試験場中国支場(当時姫路市、後に中国農業試験場と改称し福山市へ移転)に採用。同27年山口県農業試験場へ転出、その後イネ紋枯病指定試験を担当。同47年から再度中国農業試験場、さらに同61年から九州農業試験場で勤務。

同63年3月環境第1部長を最後に農水省を退官。引き続き住友化学工業(株)技術顧問として現在に至る。農水省在職中JICA派遣職員として韓国、インドネシアへ出張、またASPAC、IRRIの国際会議に参加する。中国農業試験場在勤中本学会関西西部会幹事、また6年間学会評議員を務める。昭和44年に学位、同50年に日本植物病理学会賞を受ける。

試験場在勤中に研究対象とした病害は、イネいもち病、紋枯病、ムギ赤かび病、株腐病、イネ科牧草冠さび病、かさ枯病、アブラナ科野菜根こぶ病、果菜類灰色かび病など。主として発生生態の解明、予察技術、防除法の確立について研究。メーカーでは新開発された殺菌剤の実用化についての研究などに参画。いもち病については発生予察特別報告第14号(農林省植防課)、紋枯病は指定試験報告第8および11号(農水省技会事務局)として公表、その他農試報告など機関誌を通じて報告した。また退官後わが国で行われた紋枯病研究業績を纏め、「イネ紋枯病」(日植防協会)を出版した。このように終始研究を続けることができたのは、鏑方末彦、岡本弘、後藤和夫博士を始め多くの方々のご指導、ご支援の賜物である。

これまでの研究足跡を顧みると、地道な内容のものが多く、昨今のような最先端の研究とは縁遠いものであった。しかしどんなに小さい研究でも自分で解明、解決できたときの喜びは、他人には理解できない格別なものがあり、これが研究の持続力、推進力になったように思っている。

永年会員 池上八郎



昭和3年1月12日岐阜県で生まれ、岐阜農林専門学校農科を経て、昭和26年北海道大学農学部農業生物学科植物分科（7名中に今は亡き馬場徹代と小林次郎の両君在籍）卒業、昭和27年5月岐阜大学助手（農学部農学科植物病理学研究室）、橋岡良夫教授から稲こうじ病の研究テーマをいただき、専攻学生と共に

昭和43年まで研究と教育を行った。陸稲での本病は散発的と株毎集団的の発生があり、前者は穂ばらみ期に、後者は幼芽期に感染するものと結論づけた。稲こうじ病は吉野正義、孫工弥寿雄、園田亮一の諸氏と研究交流した。昭和41年「稲こうじ病の伝染機構に関する研究」で北海道大学から農学博士の学位を受く。同41年7月から1年間、米国カリフォルニア大学 Prof. C. E. Yarwood 教授と共同研究する。同45年から「アブラナ科植物の根こぶ病に関する研究」を専攻学生と共に研究と教育が始まる。同50年教授、同53年8月ミュンヘンでの国際植物病理学会議に出席・発表する。ヨーロッパの根こぶ病研究者と研究情報交流のため昭和58年から2か月、このうち40日は英国国立野菜研究所の Dr. S. T. Buczacki 研究室に、その後アイルランド、ドイツおよびフランスの大学と研究所を歴訪した。同63年8月、京都の国際植物病理学会議に出席・発表し、「Clubroot workshop」を司会する。根こぶ病菌の寄生細胞内での発育過程を電子顕微鏡で示し、また根こぶ由来の保菌カルスの継代培養の研究などを行った。根こぶ病は田中秀平、堀内誠三、吉川宏昭、加藤喜重郎、高橋賢司、内記隆の諸氏と研究交流した。平成3年3月定年退官、同年4月名誉教授となる。教育関係としては昭和60年まで10余年、岐阜県立林業短期大学で樹病学を担当した。平成3年4月愛知淑徳短期大学非常勤講師、同7年教授となり同13年3月退職する。著書として「土壌病害の手引き」根こぶ病分担執筆（日本植物防疫協会）と「新編植物病原菌類解説」池上・勝本・原田・百町共著（養賢堂）がある。日本植物病理学会評議員18年、同学会関西西部会長1年、平成10年5月に貢献者表彰される。

要望：小学校・中学校・高校の若い生徒達への微生物とウイルスについての教育の強化を望みます。

永年会員 勝本 謙



山口県出身、昭和2年9月28日清津府で生まれ、京城府（現ソウル市）に住んでいた。昭和24年岐阜農林専門学校を卒業、山口大学で日野巖教授の仕事を手伝うことになった。母体が獣医畜産専門学校だったので、農学科の研究室は文字通りゼロからの出発であった。昭和25年になると教養課程を終えた第一期

生が専門課程へ移行してくるため、大急ぎで講義室と実験室が整備されたが種々の事情から不完全講座ばかりで、教授の発令は昭和26年度に持ち越され、農学科では助手2名と私を含む数名の研究室勤務の職員がとりあえず25年度に辞令を交付された。設備が整わなくても学生の実習を考えなくてはならず、材料の植物寄生菌を探し歩くのが私の仕事のひとつであった。そのうちに日野教授が続けていた竹類寄生菌の研究を担当することになり、これが私の菌類分類学の研究の端緒となった。とはいってもそのほかの研究や、また若い職員が少ないのでいろいろな雑用に忙しい毎日であった。竹類上に多く見られる子囊菌類に興味を持って調べていたが、その頃はそんな研究をする人はほとんどおらず、変わったやつだと思われるかもしれない。昭和40年に助手になるまでは研究費や旅費とは無縁だったが私の仕事の基礎を蓄積できたのはむしろこの時期であった。昭和52年助教授、昭和63年に教授となり、平成3年3月に定年退職、ここで思いがけなく鳥取大学に大学院連合農学研究科教授として赴任することになった。鳥取大学で初めて学位（博士）授与関係の仕事に追われながら2年間で過ごし、平成5年3月再び定年退職、山口市に戻って菌類分類の研究を続けている。学会では作物病名目録の編集以外に何もしていないが、病原菌の学名や分類についての個人的な問い合わせが時折ある。地元ではきのこの同好会を作って、一般の人にきのこだけでなく菌類全体の生態系における重要性を認識してもらうことに努めているものの、なお道遠しと感じながらの日々である。

永年会員 根本正康



昭和2年6月2日、神奈川県で生まれ育つ。東京府立高等学校理科から昭和28年北海道大学農学部農業生物学科卒業。最終の旧制大学卒業である。昭和29年助手、菌学実験担当。昭和36年農林省に出向。北海道農試病昆部病害第2研究室に配属された。昭和42年3月から2年間カンボジア王国に出張。帰国後、

昭和46年、病害第1研究室長。昭和53年から2年6ヶ月、ブラジル国セラード農業研究センターに派遣され、帰国後昭和56年東北農試環境部病害研究室長。昭和63年3月退職。同年アグロカネシヨウ株式会社に技術顧問として7年間勤務した。

北海道は萎黄型のウイルス病が多く、後にマイコプラズマであるとされたが、大学時代は福土教授のご指導により、エゾキク萎黄病（Aster Yellows）の研究を行ない、媒介昆虫を発見できた。はじめ *Eutettix* sp. として発表したのが *Omaniella flavopicta* とされ、属名が更に *Ophiola*, *Scleroracrus* と変り、キマダラヒロヨコバイの和名が与えられた。その後フキ、ニンジン、セロリーなどの萎黄病も同定した。カンボジアでは調査、研究指導にあたり、専門家の団長という大役を務め、国王勲章を授与された。帰国後日本で初発のメロンスカッシュモザイクウイルスを発表したのが印象に残る。ブラジルでは第1次の派遣であり、基礎作りが重点であったが、ブラジリア大学 Lin 教授とメロンの病害を発表した。東北時代はダイズ黒根腐病の防除、オーチャードグラスのモザイク病などを扱ったが、東北地方でははじめてトウモロコシさび病を発表した。

学会に関しては北農試時代宇井先生のご指導のもと、学会誌の発送を行い、東北では編集委員、また1ヵ年東北部会長を務めた。非才にも拘らず、いまだに大学、試験場の方々から、菌類その他の問合せがある。少しは学会のお役に立っているのかも知れない。

永年会員 大畑貫一



昭和2年7月29日島根県益田市で出生。旧制浜田中学から陸士へ、終戦で中退。昭和24年鳥取農林専門学校卒業、同年農林省へ入省、農事試験場東海支場（後の東海近畿農業試験場）、昭和29年9月農業技術研究所、同41年9月四国農業試験場、同46年10月同病害研究室長、同51年4月農業技術研究所細菌病第2

研究室長、同56年農業研究センタープロジェクト研究第2チーム長、同59年7月農業環境技術研究所微生物管理科長を経て、同62年9月農林水産省を退職。

この間、農薬登録保留基準値検討会委員（環境庁）、科学技術会議専門委員（内閣）を併任。同49年熱帯畑作調査のためインドネシア、同53年日韓農業研究協力評価のため韓国、同55年日中農業技術交流団員として中国、同56年FFTC/ASPAC「稲病虫害防除」セミナー出席のため韓国へ出張。

東近農試では後藤和夫室長の下でイネ白葉枯病菌のイネ被害葉およびサヤヌカグサでの越冬、イネ褐条病発見。農技研では低温によるイネのいもち病抵抗性変動機構の解明に取り組み、本研究で昭和41年東農大より学位授与、同33年もみ枯細菌病発見。四国農試ではイネ穂枯れの原因解明と防除法の確立、本研究で昭和53年学会賞受賞。再度の農技研ではレタス腐敗に関与する病原細菌と伝染経路を解明。農研センターでは連作障害の総合防除システムの確立に取り込む。

退官後は三菱化学横浜総合研究所で農薬開発研究、農林水産技術情報協会で農業技術関連雑誌の編集に携わる。

昭和39年から41年まで本学会幹事、同54年から平成5年まで同評議員。平成9年より「日本植物病名目録」の編集に携わる。平成10年本学会より貢献者に推挙された。

主な著／編書は、「稲の病害」「イネ病害防除の実際」「イネの病虫害」（共著）「微生物と農業」（共編）「作物病原菌研究技法の基礎」（共編）「日本植物病害大事典」（共著）など。

病虫害防除の現場は様々な困難に直面している。現場の抱える問題解決のために一層の活躍を期待する。

永年会員 酒井隆太郎



大正10年7月5日熊本生れ、札幌第二中学校を経て、昭和15年北大農学部農学実科入学同17年9月繰り上げ卒業、学徒兵として出陣、同20年8月中国漢口で終戦をむかえ、8ヶ月の抑留生活を終えて同21年4月復員する。昭和25年3月北大農学部生物学科植物分科卒業、同年3月31日、文部教官に任命され、植物生理学教室の助手として勤務する。田川教授の指導の下で馬鈴薯の生理形態学的研究に従事する。昭和28年8月1日農林省北海道農業試験場病理昆虫部に農林技官として同年新設された病害抵抗性研究室に勤務する。この研究室は、農林省初の試みとして、病理・育種・生理学専攻の研究者によって構成された。所属は病理昆虫部病害研究室で、室長は富山宏平さんであった。昭和35年11月「馬鈴薯疫病の培養に関する生理学的研究」で北海道大学より農学博士の学位を受ける。昭和38年1月アメリカ合衆国インディアナ州パデュー大学講師として、1年3ヶ月出向、Kuc教授の指導下で生化学を学ぶ。昭和40年10月、北農試に新設された草地開発部牧草研究室に配置換えする。

昭和44年6月、農林省農業技術研究所病理昆虫部糸状菌第3研究室長に配置換になる。昭和53年4月より帯広畜産大学畜産環境学科の教授として勤務、昭和60年同退官する。平成元年より札幌医療科学専門学校の非常勤講師として勤務、平成11年同退職。平成6年より千秋庵製菓短期大学の非常勤講師として、現在に至る。この間、部会長、評議員などを歴任、また国際協力事業などの委嘱で、フィリピン・台湾・沖縄などの病害発生調査、また昭和40年夏、第1回の植物病理化学談話会（感染生理談話会）を企画準備し、定山溪溪林荘で開催した。

私の研究には、材料として馬鈴薯が登場するが多い。その研究は増産が緊急事である食糧不足時代に始まる。北大では馬鈴薯の全生育期間を通じて生理形態学的特性を、水耕栽培技術法を開拓して、塊茎形成諸条件を明らかにした。また、北農試では馬鈴薯疫病菌の生理学的研究、特に過敏細胞死などについて一連の研究を行なった。また、牧草病害に関する研究では、牧草の抵抗性品種の選抜に病原菌の病斑形成毒素の利用を検討するため、病徴に着目した生物検定によって3種の毒素、フィロシノール、フィロスチン、およびコロナチンを単離し構造を決定したが、抵抗性品種の選抜には現時点では成功していな

い。それぞれの研究には力及ばず、やり残した事項が山ほどある。

最近の植物病理学会報には以前考えられなかった生理・生化学などを駆使した素晴らしい報告が多く拝見され、たのしく力強く思っています。

後輩の皆様に期待したい。植物病理学会の発展を願って止みません。

永年会員 佐藤昭二



昭和2年12月19日山形県に生まれる。昭和24年東京農業教育専門学校農学科卒業、在学中植物病理学を専攻平塚直秀先生のご指導を仰ぐ。昭和26年東京教育大学農学部雇、同30年助手（農学部）、同39年農学博士（北海道大学第222号、富士山およびその付近所産銹菌類の研究、とくに同地域産の樹木銹菌の種類について）。同45年東京教育大学助教授、同51年同大学教授・筑波大学教授（農林学系）併任、同52年筑波大学教授配置換え、平成3年筑波大学停年退官・名誉教授。退官後上武大学教授、平成10年同大学停年退官・名誉教授。この間、昭和47年カナダ北方森林研究所に1ヶ月間出張した。また、東京大学農学部非常勤講師（菌類学・昭和51～54年）、筑波大学において農林学類（現生物資源学類）長・農林学系長・農林技術センター長、上武大学では経営情報学科長・同学部長を務めた。研究では、植物銹菌類を対象とし、生態・分類について行った。主な課題として、富士山銹菌フロラ、銹菌の異種寄生性、オオムギおよびその近縁種に寄生する銹菌、ツガ属植物に寄生する銹菌についてなどである。この間平塚先生がライフワークとして精根こめられた日本列島産銹菌の種の記載、宿主植物、文献などを網羅した *The rust flora of Japan* の出版に関係者と一緒にお手伝いできたことは大変幸運でありよい勉強になった。学会のかかわりは、昭和25年に入会し今日に至りましたがこの間会計幹事（昭和51～52年）、日本有用植物病名目録 III 巻改訂版編集委員（昭和52年）、評議員（昭和63～平成元年）、編集委員（平成2～3年）のごくわずかの間努めたのみでした。この間多くの先生方と直接の出会いに恵まれ大変有益でした。今日までを振り返る時平塚先生よりの数多くの貴重なご教訓、長年にわたる学会を通じての多くの情報、諸先生方のご指導そして研究室を同じくした方々の温かい力添えをいただき、意欲的に多方面で活躍

を進めてくれたことはとても恵まれた環境でした。このたび思いもよらず永年会員として推挙されましたことは身にあまる思いであります。改めて皆様方に心よりお礼申し上げますと共に日本植物病理学会の一層の充実と発展をお祈りいたします。

永年会員 新海 昭



昭和2年10月8日長野県生まれ。昭和23年3月宇都宮農林専門学校農学科卒。同年4月農事試験場病理部勤務(昭和25年4月農業技術研究所と改称)。昭和39年9月植物ウイルス研究所。昭和49年10月九州農業試験場。昭和63年3月停年退職。なお、昭和37年10月～38年12月沖縄出張(総理府)、琉球政府経済局農務課および琉球農業試験場に駐。昭和63年4月～平成5年10月(社)日本植物防疫協会嘱託、植物防疫資料館のちに研究所小平分室勤務。平成5年4月～7年3月山梨県客員研究員(嘱託)、果樹試験場勤務。

西ヶ原での研究は、稲作の早期化が全国的に始まってウイルス病が蔓延した時期であった。私は稲ウイルス病のウンカ・ヨコバイによるウイルス媒介の問題を中心に研究を行った。なお、沖縄ではサツマイモてんぐ巣病の媒介昆虫探索などを現地で研究に当たった。ウイルス研では野菜などのファイトプラズマ病の虫媒伝染に関する研究を行った。九州農試では、東南アジアの「緑の革命」の影響を受けて九州に発生したわい化病などの発生生態およびサツマイモなどのウイルス病について研究を進めた。山梨での研究は、長年の懸案であったブドウえそ果病の媒介生物発見の端緒を開いた。

西ヶ原での研究は、稲作の早期化が全国的に始まってウイルス病が蔓延した時期であった。私は稲ウイルス病のウンカ・ヨコバイによるウイルス媒介の問題を中心に研究を行った。なお、沖縄ではサツマイモてんぐ巣病の媒介昆虫探索などを現地で研究に当たった。ウイルス研では野菜などのファイトプラズマ病の虫媒伝染に関する研究を行った。九州農試では、東南アジアの「緑の革命」の影響を受けて九州に発生したわい化病などの発生生態およびサツマイモなどのウイルス病について研究を進めた。山梨での研究は、長年の懸案であったブドウえそ果病の媒介生物発見の端緒を開いた。

「稲ウイルス病の虫媒伝染に関する研究」で昭和36年12月東北大学から農学博士。昭和38年3月日本植物病理学会賞を受賞。日本植物病理学会評議員(昭和55～62年)、同編集委員(昭和59～62年)、同九州部会会長(昭和61～62年)、同賞選考委員(昭和61～62年)。第5回国際植物病理学会議では昭和63年4月から1年間、会議前後の諸業務に携わった。日本植物病理学会から平成10年5月貢献者表彰状、平成15年3月永年会員。

私が行った研究はウイルス病の虫媒伝染に関する生態学的な一部分に過ぎない。西ヶ原で研究を始めたころのウイルス研究者はごく少人数であったが、久しぶりに平成15年度大会に出席してみると研究者も著しく増え、研究発表も

活発で正に隔世の感がある。今後とも、植物病理学各分野での研究が益々発展することを祈念したい。

永年会員 篠田辰彦



昭和3年1月26日山口市に生まれる。山口中学校、山口高等学校(旧制)をへて、昭和26年東京大学農学部農学科を卒業。同年農林省動植物検疫所(のち、植物防疫所)に奉職。羽田、東京、調査課、国内課、国際課をへて、農林本省農業改良局植物防疫課に配置換え。発生予察係に所属。昭和36年農林省

東北農業試験場栽培第2部病害研究室に出向。昭和41年九州農業試験場畑作部畑病害研究室長。昭和42年8月農林省農業技術研究所病理科長付きに配置換え。同年同月農林省退職(復帰予定)。同年9月外務省所管社団法人海外技術協力事業団(OTCA)に出向。農業開発協力室に所属。カンボディア、台湾、タイ、インドネシアの農業事情調査に従事。昭和45年農林水産省に復帰。横浜植物防疫所調査課長に就任。昭和48年神戸植物防疫所大阪支所長。昭和51年横浜植物防疫所東京支所長。昭和53年同所成田支所長に配置換え。昭和54年「開墾地土壌における微生物フロラ、特に微生物フロラと土壌病原菌との関係に関する研究」で東京大学より農学博士の学位を受けた。昭和56年名古屋植物防疫所長に就任。昭和57年5月農林水産省勲奨退職。関係者のご推挙をいただき、同年6月(株)協和コンサルタンツに就職。開発本部副本部長に就任。のち、開発本部長、取締役、総合研究所長に就任。アルジェリア、スリランカ、インドネシア、オマーン、ブータン、ラオスの農業事情調査に従事。平成10年3月31日同社退職。学会には用語委員を短期間務めた以外には寄与していませんが、本邦初のプロジェクトであるインドネシア植物病理研究プロジェクトの創設に関与できたことおよび農林水産省農業技術研究所病理昆虫部のご協力をいただき前記プロジェクト用教科書の一つとして病害虫発生予察実施要綱の英訳にスポンサー役として協力できたことにひそかな喜びを感じております。なお、私事ながら、1999年脳梗塞発病以来、糖尿病、胆石で3回入院、母(101歳—生存中)までは無理でも、父と同様80歳まではとりハビリ、通院、散歩等で努力中。

これからの学会の益々の発展を祈念いたします。

永年会員 孫工弥寿雄



昭和2年9月25日滋賀県で出生。昭和19年3月京都府立第一中学校4年修了。昭和23年3月15日京都府立農林専門学校農学科卒業。同年4月1日滋賀農試病虫部就職。山仲部長の下で「稲こうじ病の侵入経路と防除時期の研究」。昭和25年11月農林省中国四国農試に採用になり土井室長の下で「根の原形質流

動とイネいもち病の抵抗性品種間差の研究」, 昭和27年から高坂室長の下で「イネ紋枯病の発生生態, 抵抗性品種間差異, 防除方法の研究」, 昭和37年から桜井室長の下で「イネ縞葉枯病に関する研究 1. イネ品種の抵抗性品種間差異, 2. イネ品種に対する縞葉枯ウイルスの感染と増殖の研究」, 昭和43年2月から中国農試技術連絡室連絡調整科長および企画連絡科長を計6年間担当し, 中国地域の研究連絡・調整を実施。昭和48年3月京都大学から「イネ縞葉枯病に関する研究」で農学博士を授与。昭和48年4月九州農試畑作部畑病害研究室長になり「水利用による土壌病害防除に関する研究」「サトイモ黒斑病に関する研究」等を実施。昭和52年11月政府長期派遣職員として「ブラジル農業研究計画(セラード)」に参加。昭和58年10月野菜茶試久留米支場病害研究室長になり, 「施設野菜病害の感染源制御(トマト青枯病)」「キャベツ萎黄病に対する拮抗微生物に関する研究」等を実施。昭和63年3月農水省を退職しました。今考えると, 昭和43年2月から中国農試企画室で研究連絡・調整業務を長期に担当しましたので, 残念ながら学会業務のお役には余り貢献できず申し訳なく思っています。協本先生が九州大学の編集委員長当時に編集委員として参加させ頂いた程度であります。退職後は, 民間企業の顧問として「現役時代の目標でありました土壌病害の拮抗微生物製剤の開発」に取り組み, 情熱を燃やして参りましたが, 当初目標には未だ道遠い感じがいたしております。終わりにあたり永年会員推挙にお礼を申し上げますと共に, 本学会の益々のご発展をお祈りいたします。

永年会員 高野喜八郎



大正15年7月17日, 富山県高岡市に生まれる。昭和23年3月高岡工業専門学校電気科卒業, 父の経営していた(株)砺波農機製作所に勤める傍ら, 家業の農業に従事。昭和25年4月東京農業大学農学部農学科(旧制)に入学, 三宅市郎教授の指導を受けて昭和28年3月卒業。富山県立小杉高等学校に就職, 農業

教育に携わる。昭和34年4月富山県産業教育館に転じて, 当時県下農業高校の実験・実習の充実, 強化を期して行われた共同実習・実験の作物保護学実験を担当した。日本植物病理学会の初発表は, 昭和38年のヒマワリ黒斑病(新病害)で, 30 haの牧野, 飼料作物の実習圃場で採取したものである。昭和44年4月, 農業自営者養成を目指した全寮制の県立中央農業高校に舎監長として移る。ここでも, 「作物保護」を担当して12年間, 授業の傍らカノコユリ鱗片先腐病その他の新病害と防除の研究を行った。昭和56年4月から昭和62年3月の停年退職までの6年間は県立有磯高校へ転任して, マンサク円星病等の病原を特定して発表した。高等学校では, 授業や生徒指導のために研究は極めて制約されたが, 停年退職して以降は富山県花総合センターへ勤務して現在に至っている。なお, 富山県立技術短期大学へは昭和42—43年, 昭和63年—平成6年非常勤講師として作物保護学や植物保護学実験の講座を担当した。富山県花総合センターでは, 花の病害の調査研究が本務であったので, センター内での発生病害のみならず, 栽培農家からの病害診断依頼もあって忙しい。

近年の花の栽培は極めて多様化しているので未報告の病害もまた多くて苦勞するし, 防除にしても環境汚染や薬剤耐性菌への配慮や, 病原菌の種類で薬剤を選択する時代になって, いよいよ病名の決定の正確さと速度とが要求されることとなった。病害診断の素朴な研究もまた大事にしなければという思いで, 健康のゆるす限り, 今しばらく現役で頑張りたいと思っております。

永年会員 都丸敬一



5年前に学会貢献者に推挙され、学会ニュース第8号（1998年8月）に履歴、職歴、学会関連事項などを記した。今回はなるべく重複を避けて記載する。

昭和2年11月27日群馬県に生まれる。旧制第一高等学校（理乙）を経て、東京大学農学部農学科を昭和27年卒業。明日山秀文教授の下で植物病理学（植物ウイルス学）を専攻、同年日本専売公社（現JT）入社。秦野たばこ試験場、中央研究所、同生物実験センター所長、盛岡たばこ試験場を経て、昭和59年退職。その間、昭和36年より1年間、オランダ国立ワゲニンゲン農科大学、ウイルス研究所に出張、留学。退職と同時に東京農業大学教授、総合研究所勤務。研究活動のほか植物ウイルス（病）学、生物工学概論（短大）等の講義を担当。同61年大学院指導教授、平成10年停年により退任。客員として現在にいたる。研究教育活動の間、学部教科書として、植物病理学（1978、共著、朝倉書店）、新植物病理学（1992、共著、同）を、また専門書として「新編植物ウイルス学」（1978、共著、養賢堂）および「改訂新編植物ウイルス学」（1988、共著、同）を共編著者または共著者として出版した。近年「植物のウイルス病物語」（2001、全国農村教育協会、単著）の初心者向け読み物風入門書を上梓した。また研究活動の一環として、文部省（日本学術振興会）による「東南アジア農学学術交流計画」の日本側拠点校となった東京農業大学の一員として、インドネシア、タイ、フィリピンなどの大学との共同研究と人物交流に約10年間にわたって参画した。この間、日本側協力大学の先生方のご協力を得たことは感謝に耐えない。このプロジェクトは1996年頃に終わったが、インドネシアでは当時日本に留学した博士の学位取得者が、現在、各地の大学で学長、副学長、大学院長、農学部長などの要職に就任している例が多い。植物病理学専攻者がこれらの元留学生の中心となっていることも特筆される。これらの研究者と日本側研究者の協力による「Plant Viruses in Asia; Gadjadara Univ. Press, 1263pp. 1998」が共編者として刊行された。学会の東南アジアに対する関心もより高められるよう期待する。

貢献者 平野和彌



昭和8年1月7日東京小石川に生まれ、昭和19年から14年間に外房州で過ごす。昭和31年千葉大学園芸学部卒。（財）日本園芸生産研究所を経て、昭和33年千葉大の助手となる。河村貞之助教授ならびに飯田格教授の薫陶のもとで教育研究に励んだ。卒論以来線虫病に興味を抱き、当時の線虫ブームに煽られるま

まその道を歩んだ。その後土壌伝染病に関心を広げ、昭和58年線虫病とフザリウム病との複合病に関する論文で農学博士（北海道大）。講師、助教授を経て昭和61年千葉大教授、同大自然科学研究科博士課程教授を併任。平成10年3月停年退職した。

その間文部省長期在外研究員で米国コーネル大、カナダマックギル大に出張。非常勤講師は新潟大学農学部（昭和52年から隔年で20年）、東京農工大大学院農学研究科（昭和53年）、東京大学農学部（昭和58年から11年）、北海道大大学院農学研究科（昭和63年）で線虫学、土壌伝染病特論、応用動物学、植物寄生病特論などの講義を担当した。平成5年には「線虫と他病害との複合病に関する一連の研究」で日本植物病理学会賞を受賞、平成10年千葉大名誉教授。

JSPS 関連による海外研究調査に昭和54年以降数回にわたり参加したほか、海外からの研究者、留学生を指導。JICA 筑波国際農業研修センターの非常勤講師（講義と実験）は昭和59年以降20年継続し、現在も行っている。

学会役員は日本植物病理学会では、評議員、庶務幹事長、関東部会長、病名調査委員、学会報編集委員、学会賞選考委員、会計監査委員、選挙管理委員などに従事したが、他に関係する諸学会の運営にも携わった。

著書には「新植物病理学」（共著）、「応用動物学実験法」、「作物のフザリウム病」、「新版土壌病害の手引き」、「日本植物病理学史」、「原色図説花と庭木の病害虫」（以上分担執筆）などがある。

線虫といえば *C. elegans* で華々しく脚光を浴びる先端分野に発展したが、植物病理学の立場から他人が手掛けない分野に首を突っ込んで長い歳月を費やした者としては、これからは病理屋さんで線虫病に関心をもつ人がもっと増えて欲しいと願う次第である。

【関連学会研究集会情報】

1. 第3回 糸状菌分子生物学コンファレンス

日 時：平成15年11月6日～7日
 会 場：東京大学農学部弥生講堂（〒113-8657 東京都文京区弥生1-1-1）
 問合わせ先：糸状菌分子生物学研究会
 〒113-8657 東京都文京区弥生1-1-1
 東京大学大学院農学生命科学研究科応用生命工学専攻
 北本勝ひこ
 Tel. 03-5841-5161, FAX. 03-5841-8033
 E-mail: akitamo@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp
 または、東京農工大学農学部植物病理学研究室
 有江 力
 Tel. 042-367-5691, FAX. 042-367-5691
 E-mail: arie@cc.tuat.ac.jp
<http://www.biochem.osakafu-u.ac.jp/~fmbsj/>

【会員の動静】

1. 人 事

(1) 大学関係

畑谷達児	H14.10	北海道大学大学院 農学研究科 植物病原学分野 講師
吉野嶺一	H15. 3	玉川大学 農学部 作物学研究室 教授 退職
亀谷満朗	H15. 3	山口大学 農学部 生物生産科学講座 教授 退官
澤柳利実	H15. 4	東京農業大学 農学部 微生物資源学研究室 副手
木場章範	H15. 4	高知大学 農学部 植物工学研究室 助教授
草場基章	H15. 4	佐賀大学 農学部 植物病制御学研究室 助教授

(2) 農水省研究機関関係（平成15年6月10日現在）

藤沢一郎	H15. 3	退職（中央農業総合研究センター 病害防除部長），鯉沼学園へ
家城洋之	H15. 3	退職（果樹研究所 ブドウ・カキ研究部長），中央果実基金へ
手塚信夫	H15. 3	退職（花き研究所 生産利用部長），武蔵野種苗園へ
大津善弘	H15. 3	退職（果樹研究所 生産環境部 病害研究室長）

兼松誠司	H15. 4	農林水産技官 研究調査官 併任 大臣官房企画評価課・生産局農産振興課
高橋賢司	H15. 4	中央農業総合研究センター 病害防除部長
萩原 廣	H15. 4	東北農業研究センター 野菜花き部長
長谷部 亮	H15. 4	農業環境技術研究所 化学環境部 有機化学物質研究グループ長
堀田光生	H15. 4	北海道農業研究センター 生産環境部 病害研究室 主任研究官
鈴木文彦	H15. 4	九州沖縄農業研究センター 地域基盤研究部 病害生態制御研究室 主任研究官
加納 健	H15. 4	国際農林水産業研究センター 企画調整部 国際情報部 主任研究官
加藤雅康	H15. 4	国際農林水産業研究センター 生物資源部 主任研究官
平八重一之	H15. 4	中央農業総合研究センター 北陸水田利用部 病害研究室長
園田亮一	H15. 4	中央農業総合研究センター 北陸水田利用部 病害研究室 主任研究官
島根孝典	H15. 4	果樹研究所 企画調整部 連絡調整室 室長補佐
藤田佳克	H15. 4	北海道農業研究センター 企画調整部 研究調整官
山崎浩道	H15. 4	東北農業研究センター 総合研究部 総合研究第3チーム 主任研究官
酒井淳一	H15. 4	東北農業研究センター 地域基盤研究部 病害管理研究室 主任研究官
中島敏彦	H15. 4	東北農業研究センター 水田利用部 上席研究官
花田 薫	H15. 4	農業生物資源研究所 企画調整部 研究管理科長
宮田伸一	H15. 4	果樹研究所 研究センター 生産環境部 病原機能研究室

井上伊織 H15. 4 中央農業総合研究センター
病害防除部 糸状菌病害研究室
井上康宏 H15. 4 中央農業総合研究センター
病害防除部 細菌病害研究室

(植物防疫所関係等)

後藤正昭 H15. 4 門司植物防疫所長
栗原金光 H15. 4 横浜植物防疫所札幌支所 次
席植物検疫官
上田幸史 H15. 4 横浜植物防疫所調査研究部
調査官
井上 豊 H15. 4 神戸植物防疫所大阪支所舞鶴
出張所 植物検疫官

(3) 都道府県試験研究機関関係

宮島邦之 H15. 3 退職（北海道立上川農業試験
場 場長）
藤根 統 H15. 4 北海道立中央農業試験場 ク
リーン農業部 病虫科
野津あゆみ H15. 4 北海道立根室支庁 農業振興
部 農務課 農村振興係
野田智昭 H15. 4 北海道立北見農業試験場 作
物研究部 畑作園芸科
中澤憲夫 H15. 4 青森県農林総合研究センター
フラワーセンター21 研究調
整監
雪田金助 H15. 4 青森県農林総合研究センター
県南果樹研究センター 研究
管理員
中南 博 H15. 4 岩手県農林水産部 農業普及
技術課 技術副主幹兼生産環
境係長
結城昭一 H15. 3 退職（山形県病害虫防除所
所長）
藤田靖久 H15. 3 退職（山形県農業大学校 校
長）
佐久間比路子 H15. 3 退職（山形県病害虫防
除所 専門防除員）
山川隆平 H15. 4 山形県農林水産部 次長
田中 孝 H15. 4 山形県山村総合支庁 農業普
及課 技術補佐
竹田富一 H15. 4 山形県農林水産部生産流通課
技術補佐

加藤智弘 H15. 4 山形県病害虫防除所 防除企
画専門員
尾形 正 H15. 4 福島県果樹試験場 病理昆虫
部 専門研究員
中山喜一 H15. 4 栃木農試 病理昆虫研究室
室長
白石俊昌 H15. 4 群馬県農政部 担い手支援課
柴田 聡 H15. 4 群馬県農業技術センター
酒井 宏 H15. 4 群馬県農業技術センター
漆原寿彦 H15. 4 群馬県農業技術センター
池田健太郎 H15. 4 群馬県農業技術センター
根岸七緒 H15. 4 埼玉県農林部 農産物安全課
主任
橋本光司 H15. 4 埼玉県農林総合研究センター
技術普及・産学携担当 室長
瀧口康策 H15. 4 埼玉県農林総合研究センター
園芸研究所（所属名変更）
野田 聡 H15. 4 埼玉県農林総合研究センター
園芸研究所（所属名変更）
峯岸直子 H15. 4 埼玉県農林総合研究センター
園芸研究所（所属名変更）
庄司俊彦 H15. 4 埼玉県農林総合研究センター
園芸研究所（所属名変更）
島崎 豊 H15. 4 埼玉県農林総合研究センター
茶業特産研究所（所属名変更）
伊藤実佐子 H15. 4 千葉県病害虫防除所
鈴木 健 H15. 4 千葉県産業支援技術研究所
久保田まや H15. 4 東京都農林事務所 振興課
生産振興係 次席
要 司 H15. 3 退職（神奈川県農業総合研究
所 生物資源部 部長）
市川和規 H15. 4 山梨県総合農業試験場 栽培
部長
牧野孝宏 H15. 4 静岡県病害虫防除所 所長
芳賀 一 H15. 4 静岡県中遠農林事務所 技師
西島卓也 H15. 4 静岡県茶業試験場 主任研究
員
黒田智久 H15. 4 新潟県農業総合研究所 作物
研究センター 主任研究員
前田征之 H15. 4 新潟県農業総合研究所 作物
研究センター 主任研究員
山口吉博 H15. 4 新潟県下越病害虫防除所 主
任

横山泰裕	H15. 4	新潟県農業総合研究所 作物研究センター 専門研究員	門脇義行	H15. 3	退職（島根県農業試験場 次長）
名畑清信	H15. 4	富山県農業技術センター農業試験場 場長	粕山新二	H15. 4	岡山県農業総合センター 農業試験場 副場長
加藤昌亮	H15. 4	岐阜県岐阜地域振興局 環境課 主任技師	伊達寛敬	H15. 4	岡山県農業総合センター 農業試験場 作物研究室 室長
川部 知（旧姓 小林）	H15. 4	岐阜県岐阜地域農業改良普及センター 技師	新田浩通	H15. 4	広島県立農業技術センター 企画情報部 専門技術員
小枝 剛	H15. 4	岐阜県森林科学研究所 主任研究員	十河和博	H15. 4	香川県農業試験場 病虫害防除所 所長
深谷雅博	H15. 4	愛知県農業総合試験場 環境基盤研究部 病虫害グループ 総括研究員	森 充隆	H15. 4	香川県農業試験場 病虫害防除所 主任研究員
平野哲司	H15. 4	愛知県農業総合試験場 環境基盤研究部 病虫害グループ 主任研究員	鐘江保忠	H15. 4	香川県農業試験場 病虫害防除所 主任研究員
加藤順久	H15. 4	愛知県農業総合試験場 環境基盤研究部 病虫害グループ 主任研究員	稲荷 傑	H15. 4	愛媛県病虫害防除所
加藤晋朗	H15. 4	愛知県農業総合試験場 企画普及部 企画調整グループ 主任研究員	奈尾雅浩	H15. 4	愛媛県農業試験場
木下忠孝	H15. 4	愛知県農業総合試験場 東三河農業研究所 茶業グループ 総括研究員	橘 泰宣	H15. 4	愛媛県立果樹試験場
間下なぎさ	H15. 4	愛知県農業総合試験場 環境基盤研究部 病虫害グループ 技師	倉田宗良	H15. 3	退職（高知県農業技術センター 所長）
松崎聖史	H15. 4	愛知県農林水産部 農業経営課 環境植防グループ 主査	古谷眞二	H15. 4	高知県農業技術センター 茶業試験場 場長
三宅律幸	H15. 4	愛知県農業総合試験場 環境基盤研究部 病虫害防除グループ 専門員	稲田 稔	H15. 4	佐賀県農業試験研究センター 土壌環境部 病虫害農薬研究室
永井裕史	H15. 4	愛知県農業総合試験場 環境基盤研究部 環境安全グループ 技師	森田 昭	H15. 3	退職（長崎県総合農林試験場 東彼杵茶業支場 場長）
長谷部匡昭	H15. 4	滋賀県湖南地域農業改良普及センター	中村吉秀	H15. 4	長崎県病虫害防除所 係長
長岡栄子	H15. 3	退職（京都府農業資源研究センター）	菅 康弘	H15. 4	長崎県果樹試験場 病虫害科 研究員
藤田圭二	H15. 4	奈良県南部農林振興事務所 主査	江口武志	H15. 4	熊本県農業研究センター 生産環境研究所
			横山 威	H15. 4	熊本県農業研究センター 生産環境研究所
			上原勝江	H15. 3	退職（沖縄県病虫害防除所 所長）
			河野伸二	H15. 4	沖縄県農業試験場 企画管理部 バイテク研究室 室長
			金城衣恵	H15. 4	沖縄県農林水産部 営農推進課 専門技術員

2. 学位取得者（課程博士・論文博士）

- | | | | | | |
|---------------------|--------|--|----------------------|--------|--|
| 岩本 晋 | H14. 3 | 筑波大学 博士（農学）モミ落葉分解菌 <i>Thysanophora penicillioides</i> の分子生態学的研究 | 永坂 厚 | H15. 3 | 東北大学 博士（農学）植物病原糸状菌 <i>Rhizoctonia solani</i> の保持するプラスミド pRS224 にコードされる特異タンパク RS224 の解析 |
| Dono Whayuno | H14. 3 | 筑波大学 博士（農学）A taxonomic study on <i>Phragmidium</i> species (Uredinales) parasitic on the genus <i>Rosa</i> | 木原淳一 | H15. 3 | 東北大学 博士（農学）近紫外光による植物病原糸状菌の光調節反応に関する研究 |
| 大高伸明 | H14. 7 | 筑波大学 博士（農学）縞枯れ林の立ち枯れ帯におけるキクイムシ類およびオフィオストマ様菌類に関する研究 | 薄 史暁 | H15. 3 | 筑波大学 博士（農学）根部エンドファイト <i>Heteroconium chaetospora</i> とハクサイとの相互作用に関する研究 |
| 五味剣二 | H14. 9 | 愛媛大学 博士（学術）Molecular Analysis of Citrus Defense Response | 清水 巧 | H15. 3 | 東京大学 博士（農学）タバコモザイクウイルスの複製・移行に関与する宿主タンパク質の構造と機能に関する研究 |
| Pongphen Jitareerat | H14. 9 | 静岡大学 博士（農学）Regulatory mechanisms for the syntheses of plant macerating enzymes. | 鄭 熙英 | H15. 3 | 東京大学 博士（農学）Phylogenetic classification of phytoplasmas that occur in Korea |
| 篠木 武 | H14. 9 | 神戸大学 博士（農学）ナシ黒斑病感染系における活性酸素種の生成に関する研究 | 西川尚志 | H15. 3 | 東京大学 博士（農学）ファイトプラズマの染色体外 DNA に関する研究 |
| 鈴木智子 | H14. 9 | 神戸大学 博士（農学）ナシ黒斑病菌の感染行動と宿主細胞の応答に関する細胞学的研究 | Dionisio G. Alvindia | H15. 3 | 東京農業大学 博士（農学）Studies on postharvest diseases and development of management systems to preserve quality of non-chemical bananas |
| 洪 鎮成 | H15. 3 | 北海道大学 博士（農学）キュウリモザイクウイルスダイズ系統の分子進化とダイズやツルマメへの適応 | 松本裕之 | H15. 3 | 静岡大学 博士（農学）軟腐性 <i>Erwinia</i> 属細菌におけるペクチナーゼ生産制御機構の分子生物学的解析 |
| Yambao, Ma, Leonora | H15. 3 | 北海道大学 博士（農学）クローバー葉脈黄化ウイルス HC-Pro 遺伝子の複製と病原性における役割 | 田口義広 | H15. 3 | 岐阜大学 博士（農学）植物病害防除のための <i>Bacillus subtilis</i> IK-1080 の処理方法に関する研究 |
| 関口博史 | H15. 3 | 北海道大学 博士（農学）クローバー葉脈黄化ウイルスゲノム複製における 3' 末端領域シス因子の解析 | 井上伊織 | H15. 3 | 名古屋大学 博士（農学）メロンつる割病菌の病原性関連遺伝子の単離 |
| 森田聡一郎 | H15. 3 | 東北大学 博士（農学）根内糸状菌 <i>Heteroconium chaetospora</i> によるハクサイ地上部の抵抗性誘導 | 村上二郎 | H15. 3 | 神戸大学 博士（農学）Genetic studies on the species specific parasitism of <i>Magnaporthe oryzae</i> |

- 中馬いづみ H15. 3 神戸大学 博士（農学）
RFLP 分離分析・蛍光染色
法・PFGE 法を用いたもち
病菌のゲノム構造解析
- 呉 洪植 H15. 3 神戸大学 博士（学術）
Characterization of the
species-specificity on oat in
the blast fungus *Magnaporthe
oryzae*
- 藤崎恒喜 H15. 3 京都大学 博士（農学）
Analyses of interactions
among plant and viral factors
required for bromovirus
infection
- 三谷 滋 H15. 3 鳥取大学 博士（農学）殺菌
剤 cyazofamid の生物特性に
関する研究と機能解析
- 浜田博幸 H15. 3 愛媛大学 博士（農学）
Capsicum 属植物の L 遺伝子
によるトバモウイルス抵抗性
に関する研究
- 大谷耕平 H15. 3 愛媛大学 博士（農学）
Molecular Mechanism of
Host Susceptibility to Plant
Pathogen
- 中村正幸 H15. 3 鹿児島大 博士（農学）
Geotrichum candidum のポリ
ガラクトナーゼ遺伝子に関
する研究

3. 海外長期出張者

(1) 大学関係

- 須賀晴久 H13. 3 岐阜大学
～H15. 5 USA ミネソタ大学 Cereal
Disease Lab.

(2) 農水省研究機関関係

- 吉田重信 H15. 6 農業環境技術研究所
～H16. 5 USA ミネソタ大学植物病
理学部

【書 評】

1. 井上成信著「原色ランのウイルス病—診断・検定・防
除—」, A5 版, 196頁, 発行: 2001年 3 月 (株) 農山漁

村文化協会, ¥2,900円+税

著者は長年にわたり岡山大資源生物科学研究所におい
て、ランのウイルス病について研究を重ねたこの分野の第
一人者である。ランの栽培者から寄せられる、「ウイルス
病の防除法を知りたいが、多くの参考書がその概要のみで
十分な理解が得られない。もう少し詳しい本がほしい」と
いう要望に応じて、著者の長年の研究結果と経験をまとめ
たものが本書である。各種のランおよび検定植物の病徴、
接種法、血清診断法などを含めて名刺半切大を主とした
240枚の美しいカラー写真が本書の特徴である。写真は各
病原ウイルスによる各種のラン、また花、葉などの部位、
感染後の日数などによる病徴の変化、推移も記録されてい
て、診断の有力な助けとなる。解説の記載は、1. 病徴に
よる診断、2. 検定による診断、3. ウイルスの伝染と防除
方法、4. ランのウイルス病の基礎知識。の 4 章から成
り、診断、防除を中心とした実用書として、基礎知識は後
という、一般の教科書とは逆の配列となっている。しか
し、基本的な知識もしっかり書かれていて、ランを例とし
た植物ウイルス病の教科書ともなっている。ウイルス本体
や感染葉切片のモノクロームの電子顕微鏡写真、また診断
法やその結果を示す図表も豊富にあって、理解を助ける。
ところどころに、著者ならではの豊かな経験に裏付けられ
た記載が光っている。栽培者中心のためか、遺伝子レベル
の分子診断法の詳細などを欠くのはやや惜しい気がする。

本書を手にしたとき、白地に大きくカラーのカトレアの
花を配した、艶のある表紙カバーと、その下の白地に薄い
エンジ色の書名を記したハードカバーの品良く、美しい装
丁は、評者のような一般農学書の地味なカバーに慣れた目
には極めて新鮮であった。本書はその内容から、ランの栽
培者、愛好者はもとより、研究者の座右の書として推奨さ
れる。それは、また机上に華を添えるであろう。また近年
では、ともすればなおざりにされがちな、接種法や検定植
物の育て方など基本的な実験法も詳しく記されているの
で、学生など初心者にとってもよい指導書となるものと思
われる。

本書巻末の別表によれば、ランのウイルス病の病原ウイ
ルス、主なものとしてわが国のランでは16種、これに加
えて海外で13種が知られ、このうち8種はわが国のラン以外
の植物における発生が明らかにされているという。このウ
イルスの種類の多さ、また、カトレア、デンドロビウム、
ファレノプシス等の洋ラン、春蘭、寒ランなどわが国自生
のシンビジウムやエビネラン等の東洋ランなど、ランの種
類の多様さもランのウイルス病の専門書が求められる理由
であろう。
(都丸敬一)

2. 羽柴輝良・金浜耕基編 改訂第3版「新農学実験マニュアル」 289頁 ソフトサイエンス社 6,000円+税

本書は、好評だった初版「最新農学実験の基礎」(1990年)、改訂版「植物生産農学実験マニュアル」(1995年)に引き続き、東北大学大学院の現役教官を中心に最新技術の導入による更なる内容の充実を図り執筆刊行された。内容は植物病理学は勿論のこと、植物生態学・形態学・生理学実験、交配実験、酵素実験、分子遺伝学実験、有機・無機化学実験、土壌分析学実験、昆虫学実験、実験計画法・データ解析法、廃棄物処理、防災、放射性同位元素取り扱いに至るまで広範な分野にわたり懇切丁寧に書かれている。最近の研究は境界領域にまたがって行なわれる場合も多く、そのような場面でとくに威力を発揮するものと思われる。ご利用を是非お勧めしたい。(松山宣明)

3. 浅賀宏一・加藤肇・山田昌雄・吉野嶺一編「世界におけるいもち病研究の軌跡—21世紀の研究発展を目指して—」, A4版, 261頁, 発行: 2003年3月31日 (社)日本植物防疫協会, 9500円+税

近年のいもち病菌研究の発展には目を見張るものがある。2002年にはいもち病菌のゲノムのドラフトシーケンスが Whitehead Institute により公開された。いまや本菌は植物病原糸状菌のなかで最も分子解析の進んだモデル生物といっても過言ではない。この急速な研究の展開の契機となったのが1971年の Hebert 氏による本菌完全世代の発見であることは、衆目の一致するところである。本書はこの1971年以降発表されたいもち病に関わる世界中の膨大な文献を網羅的にほぼ完璧に採録し、さらにそれら膨大な文献が紡いできたいもち病研究の軌跡を概説したものである。いもち病研究の第一線の研究者によって編集・執筆された本書は極めてユニークな企画であって、自ずと我が国におけるいもち病研究の重みを感じさせる誠に有意義で歴史に残る図書との強い印象を抱く。

一般に、新しい研究分野に参入しようとするとき、あるいは未知の研究分野の動向を知ろうとするとき、研究者はいくつかの総説・原著論文を手がかりに孫引きを繰り返し全体像を把握する。しかし、いもち病については必要な総説と文献がほぼ本書一冊に凝縮・網羅されているといつてよいであろう。本書は、これからいもち病について知ろうとする研究者にとって最適の水先案内人である。

一方、本書は現在いもち病研究に携わっている研究者にとっても貴重な情報の宝庫である。編者も指摘しているように、近年の研究動向には「いもち病菌研究」と「いもち病研究」が乖離する傾向がある。しかし「病害の防除」と

いう植物病理学の最終目標を達成するためには、両研究分野間の不断の情報交換と議論が必要であることは言うまでもない。本書は、病原菌の研究のみならず、発生生態、疫学、発生予察、病態、抵抗性機作、品種抵抗性から防除法に至るいもち病の全研究分野をカバーしている。したがって、いもち病研究者がこれら諸分野を鳥瞰し、主専門でない分野の動向を把握するために最適の書である。本書は、これら諸分野の研究者の情報交換と新たな研究展開を促す触媒となりうるばかりでなく、学生が植物病理学についての総合教養を身に着けるための高書であり、大学院レベルの講義やセミナーにおける質の高い学習資料としても多様な使い方を可能にする大変意義深いものと思う。本書は、いもち病研究者ならびにいもち病に興味を持つ植物病理学者の座右の書となることを確信するとともに、農学の教育研究機関や植物病理学関連の研究室には是非蔵書すべきものであろう。改めて、6000点にものぼる文献の採録・整理を敢行した本書の編者に敬意を表したい。(眞山滋志)

【学会ニュース編集委員コーナー】

情報提供および投稿のお願い

本ニュースは身近な関連情報を気軽に交換することを主旨として発行されております。会員の各種出版物の御紹介、書評、会員の動静、学会運営に対する御意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクトの紹介などの情報をお寄せ頂きたいお願いいたします。

投稿宛先: 〒170-8484 豊島区駒込1-43-11

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX: 03-3943-6086

または下記学会ニュース編集委員へ:

松山宣明, 塩見敏樹, 竹内妙子, 阿久津克己,
各委員宛

編集後記

学会ニュース第23号をお届け致します。本号には新たに名誉会員となられた大内成志, 土崎常男の両氏, 永年会員になられた浅川 勝, 堀 眞雄, 池上八郎, 勝本 謙, 根本正康, 大畑貫一, 酒井隆太郎, 佐藤昭二, 新海 昭, 篠田辰彦, 孫工弥寿雄, 高野喜八郎, 都丸敬一, 平野和彌諸氏のご略歴とご挨拶のお言葉を掲載させて頂きました。表彰式が4月に行なわれたにも拘わらず、原稿締切り日の関係で印刷が次号送りに

なりましたことをお許し下さい。皆様方におかれましては、くれぐれもご健康に留意され、学会及び科学の発展のために益々ご尽力下さいますようお願い致します。

学会ニュースは、和文誌が年4回発行になる関係で年4回の提供となります。会員の皆様にとってより良い情報源であり続けるよう、皆様の情報提供およびご提案を心からお願い申し上げます。 (松山宣明)
